

第13章「機械装置と工業」第4篇「相対的剰余価値の生産」
第4節「工場」【401頁～415頁】

第4節「工場」の流れ、構成

- ① 機械装置の発達した姿態、態様である“自動的工場”が分析の対象になっている。
- ② ユア博士の“自動的工場”を賛美・礼賛する著述「工場の哲学」や考え方を引用し、批判を展開する。
- ③ ー後記ー

※アンドリュー・ユース

1778年5月18日生まれスコットランド生まれ。医学博士、化学を産業に応用する努力は「化学辞典」に結実し英国学士院の会員に選ばれた。その後ロンドンで鉍物水と鉍石の分析を行う化学コンサルタント。コンサルタントの範囲は科学全般にわたり、この種のものとしては英国で最初であった。「製造業の原理」（邦訳タイトル：「工場の哲学」）

※産業革命（発明・改良）

・初めのところ40馬力のジェームズ・ワットの蒸気機関1台を15時間動かすのに1日2トンの石炭を必要とした。そのため各工場は炭鉍のそばに建てられた。

・鉄道-蒸気機関車-登場は、蒸気、石炭、鉄、投資を一つにまとめた。鉄道の建設は土木工学を発達させた。（沼を横切り、丘をトンネルで抜け、河川を渡る）

・工場が建設されるに従い、機械を製造、導入、修理する会社が登場する。産業革命の第1段階が人間の労働力にかわる機械の発明だとしたら、第2段階は、機械を製造する工作機の発明だといえるだろう。ボーリング（1774年）、ネジづくり（1800年）、木のカンナ掛け（1802年）、歯車の切断（1820年）、研削（1834年）、形づくり（1836年）などを行う様々な工作機械を開発した。アメリカの発明家、ホイットニーは部品交換が可能な機械を思いついた。これは「アメリカン・システム」と呼ばれ、

すぐヨーロッパにも導入された。

401 頁第 4 節冒頭

○「われわれは、本書の冒頭で、工場の体躯である機械体系の組成を考察した。…あるいは労働力をますます強度に搾取するための組織的手段として役立つか、を見た。」と冒頭、前節までを振り返り一機械装置の発明、発達が重要な役割を果たしたことを再確認。

○機械は、動力機（蒸気機関、水力）、配力機（ギヤ）、道具機であったこと。道具機の発達、改良がそもそもの動力（機）の発達をうながし、その巨大な動力が配力機構により利活用されるということの象徴が、第 1 節の“封筒生産自動装置”であること。

○第 2 節「生産物に対する機械装置の価値移転」、第 3 節「機械経営が労働者に及ぼす第一次的影響（a 婦人・児童労働、b 労働日の延長、c 労働の強化）搾取の強化を批判的に分析してきた。

401 頁 15 行目

○「いまやわれわれは、工場全体に、しかもそのもっとも完成した態容におけるそれに、目を転じよう。」とマルクスは述べる。つまり、上記のこうした機械システムが稼働する大きな組織体（工場）として出現する、自動的工場に目を転じようと先をすすめる。

402 頁 1 行目

○ここではたびたび登場し引用され批判される化学者（発明家）ユア博士による自動的工場に対する、ふたつの描写が紹介されている。

① 「この工場が一方では、一つの中心力（原動力）によって間断なく作動させられる一つの生産的機械体系を熟練と勤勉をもって監視する成年、未成年の、各種の労働者の協業」

→ 大規模な機械の使用にあてはまるものの、あくまでも機械的自動装置は客体であり、社会的労働が支配的（労働者主導の労働）であるということを述べている。

② 「他方、一つの同じ対象を生産するために一致して間断なく作用し、従って、いずれも一つの自動的に運動する動力に従属している無数の機械的器官および自己意識的器官から構成された、巨大な自動装置であると言う」とマルクスは指摘している。

→ 自動装置（機械装置）が主体であり、労働者はただ意識のある諸器官として、意識のない諸器官である自動装置に付属・従属させられているだけ。

402 頁 11 行目

○「ユアは、運動の出発点をなす中心機械を、単に自動装置としてのみでなく専制君主として表現することを好むのである。」「これらの大作業場では、蒸気の仁慈な感力が無数の臣下をその周囲に集めている。」とマルクスがユアを評している。

ふたつの含意

- ① 機械、工場をシステムティックに観察している。
- ② 専制君主と無数の臣下の例えのとおり、絶対的権力として支配下の労働者を意のままにする。

○①の表現は、大規模な機械装置（設備）のありとあらゆる態様にあてはまり、②の表現は、機械の資本主義的使用と、それゆえ近代的工場制度（自動的工場）を特徴づけている。大規模な機械の資本主義的使用をあらわしている。☞「自動車絶望工場」鎌田慧著、アマゾン倉庫

403 頁 7 行目

【労働者の区分（労働者の差別化・等級付与）】

- 主要労働者 道具機について働く労働者
- 助手 機械労働者の助手・下働き（そのほとんどが児童）
- 自動装置を動かす少数の労働者たち
技師、機械専門工、指物職のような機械設備全体の管理と修理に従事する労働者

407 頁 5 行目以降、“逆立ち、転倒、逆転、倒錯、従属、合体”

- 「工場手工業や手工業では、労働者が道具を利用し、工場（機械制大工業）では労働者が機械に奉仕する。」
- 「かしこでは、彼から労働手段の運動が起こり、ここ（工場）では、彼が労働手段の運動に従わねばならない。」
- 「工場では、死んだ機構（自動的工場の機械装置）が彼らから独立に存在し、彼らは生きた付属物として、この機構に合体される。」

※「シシュフォスの苦痛……、シシュフォスの岩と同様に……」の「シシュフォスの岩」とは、ギリシャ神話の登場人物で神々を二度までも欺いたことから罰を受けた。その罰は巨大な岩を山頂まで上げるよう命じられ、あと少しで山頂に届くところまで来ると、岩はその重みで谷底まで転がり落ちてしまう。この苦行が永遠に繰り返されるという逸話を工場（機械制大工業）での労働になぞらえている。

407 頁 12 行目～408 頁 1 行目

○「彼の労働を内容から解放するのであって、労働の軽減でさえも、呵責の手段となる。」とは、労働の中身、在り方を抜本的に変えてしまうこと。機械の一部に合体された労働者は単純、反復労働しかも長時間労働（408 頁-低級な種類の熟練労働）となり、筋肉の多面的な働きを抑制し、自由な心身の活動を奪うこと。

（408 頁-内容を奪われた機械労働者）

○「労働者が労働条件を使用するのではなく、逆に労働条件が労働者を使用するということは…資本主義的生産が単に労働過程であるのみではなく、同時に資本の価値増殖過程でもあるかぎり、すべての資本主義的生産に共通のこと（前置きと、ことわりを入れる）この顛倒は、機械装置をもって初めて、技術的に明瞭な現実性を受取るのである。」とは、機械装置の優位性のこと。

○「労働手段（機械）は、自動装置に転化することにより、労働過程そのものにおいて、資本として、生きた労働力を支配し、吸いつくす死んだ労働として、労働者に対立する。」この“生きた労働力を支配する死んだ労働”とは、すなわち資本は機械制大工業の中にみずからを確立するということ。

413 頁 9 行目

「われわれは～」と、註（190a）～（192）は、労働者の苛烈、苛酷な扱われ方（労災、職業病）を記述している。

この文節に関連して

○田久保さん配布の事前資料「参考 英国の児童・女子労働」（2021 年 6 月）を参照下さい。

○木綿工場内は糸が切れないようにいつも高温と湿気を保っていなければならなかった。帰路の冷たい外気にさらされていた織物工たちは、肺炎に罹りやすかった。綿ぼこりのせいで引き起こされる綿肺症と呼ばれる呼吸器の病気にも苦しめられた。

○木綿工場の機械には安全カバーが掛けられていなかったのでボロをまとった髪の高い女性労働者がまきこまれる事故が絶えなかった。特に機械の下を掃く、そうじ係に多かった。

○一日中、立ち労働の子供たちは X 脚、O 脚になってしまった。仕事のがのろいなどの理由から革ひもで打たれたり、水を張った桶に投げ込まれることもあつ

③マルクスは、機械制大工業（自動的工場）のもとで労働者が機械の付属物として扱われることを指摘する。これまでの工場手工業は労働者を工程の順序により編成、配置し精巧な道具と熟練の技術により分業にもとづく協業の生産体制を行っていた。効率化でおのおのの労働者が同じ作業を専門的に行っていたも

のが、さらなる機械の導入で機械の一部として作用するようになるということ。さらにマルクスは、人間が創り出した機械装置とこれを伴う労働条件が、資本として労働者から分離された外的存在として現れ、労働者を支配し、生きた労働を吸い尽くす死んだ労働として労働者に相対、対峙する人間労働の疎外を明らかにしている。資本としての機械の支配と人間労働の自己疎外をいっている。

参考にした文献ー 「イギリス」 岩崎書店、
「産業革命ー発明と技術革新の新時代」 同朋舎出版、
「世界史リブレットー産業革命」 山川出版

(以上)